NTS物語

吉田　隆

一、本をつくりはじめたころ

③多士済済

フジテクに入社すると、その日にセミナーの企画を命ぜられた。出版の世界は子供の頃からの夢ではあったが、大学のゼミしか連想できなかった私にとって何でこれが出版なんだと複雑な思いで仕事に向った事を思い出す。しかし、ノルマでもあった毎月二本のセミナー開催と当ったセミナーの資料集の発刊を五年間続けたことが、後に情報・出版業の世界で生きるための大きな糧となった。実績のある既存の出版社と異なり、厳しい市場で生き残りを図るためには、何より社会の新しいニーズをつかむアンテナ感覚が欠かせない。セミナーとは、その習得のための実践的手法であることがやがて分かってきた。出版活動に必要なテーマの探索、企画、編集という「本を作る」要素がセミナーという母体に凝縮されているのである。対象が本に変わり、それが大型化するほどその要素は分化せざるをえなくなるが、これらは本来起源を同じくするものだと思う。セミナーでなくともアンテナは張れるが、実践であることの強みがある。それに事業に必要な危機感覚が常に持続できる。私は次第にセミナーをセミナー屋の特殊な技術ではなく情報編集技術の原点と考えるに至り、情報・出版事業の要点として会社が生き残るための技術の伝承を心がけるようになった。

フジテクに入社当時六名の企画マンは一年後には八名に増えていた。その頃が、その後出版社に姿を変えたセミナー企業としてのフジテクの絶頂期だったのだろう。セミナーは基本的に個人技である。組織活動よりも個人を主張する強い個性の持ち主が、一匹狼的個性派集団を形成していた。今振り返ると多士済済の顔触れであったが、そのわりには組織としての不思議な安定を見せていたのは、先端情報を共有しようとする緊張感の上のバランスだったのかも知れない。しかし、それも長続きしなかった。昭和五十六(一九八一)年、○○部長他二名が独立し㈱サイエンスフォーラムを設立した。その一年後の昭和五十七(一九八二)年、私が所属した千原グループの○○氏が独立し㈱R&Dプランニングを設立した。更にその半年後、今度は○○部長が独立し㈱エスディーシーを設立した。それから間を置くことなく、私の一年後輩で同じ千原グループのライバルでもあった○○氏がサイエンスフォーラムに籍を移した。わずか二年程の間に強力なセミナー屋集団は散り散りになった。異変はサイエンスフォーラムでも続き、○○氏と運命を供にした二人の企画マン○○氏と紅一点の○○氏が昭和五十八年㈱リアライズを設立したが、昭和六十一(一九八六)年、○○氏も㈱エルアイシーを設立し独立した。かくいう私の独立は昭和五十九(一九八四)年である。サイエンスフォーラムに籍を移した○○氏を新会社に呼び戻し、共同経営による㈱ニューテクノロジーアンドサイエンスを設立した。その後共同経営を解消し、㈱エヌ・ティー・エスを設立したのが一年後の昭和六十(一九八五)年七月のことである。私のケースが他と異なるのは小野社長の協力を得ての行動であったことである。急激な変化に小野社長自身危機感を感じていただけでなく、事業に対する心境の変化もあったのだろう。フジテクが出版事業に大きくシフトするのもこの時期を境にしてのことであった。七人がバブル崩壊とその後の大不況の大波を乗り切り、それなりに支え合い競い合い先端情報を提供する企業として社会への貢献を果たしていることを思う時、あの企画集団が一つにまとまっていれば今はどれほどの情報企業に育っていたことだろうか。二年前、○○氏が病に倒れ故人となったことが悔やまれる。

セミナーとは情報の価値を計る「ものさし」でもある。フジテクの七人の侍は其々の「ものさし」を武器に自己の理念の実現を目指して旅立った。企画集団の共存が長続きしなかったのは、「ものさし」という基準軸が幾つあってもしかたなかったからなのだろう。基準軸という社会を見る目は、同時に個人の軸、アイデンティティーと切り離せない。基本的にセミナーが個人技であることの必然であったのだろうか。

小野社長との出会いが、NTSにとって幸運であったことは前回でも述べたが、同時にフジテク時代に七人の仲間の強いネットワークが築かれたことも幸運なことであった。

掲示板

今月の人事

十一月十三日付退社　市川営業所
十二月一日付入社　科学技術情報部

社内清掃について

次の日程で、本社事務所内の床掃除を行ないますので宜しくお願い致します。当日休日出勤の予定がある場合は作業に支障がありますので、必ず総務部に連絡して下さい。

十二月二十七日(日)
一月二十四日(日)

編集後記

今年も残り僅かとなり、本号を無事年内に皆様の元にお届けすることができ、ホッとしている所である。

さて、皆さんはどのようなお正月を予定されているのだろうか。私は毎年田舎に帰ってカニを喰うことがここ八年恒例になっている。私の好きなカニはタラバガニ(といって、カニというよりヤドカリに近いの)だが、これが実に美味しい。『現代おさかな事典』にも「旬は晩秋から冬、身はとろけるように甘い。ごく新鮮なものは刺身で食べられる」と記されている「身ガニ」の代表格である。カニも情報も新鮮さが命。新鮮なカニを頬ばりながら、皆さんが楽しめるようなとれたてピチピチのネタで来年も読み応えのある誌面づくり心掛けようと思う。(伊)

先月号のクイズの回答

答え　……
正解者　……なし

本年はご愛読、ご声援有り難うございました。来年も社内報をご愛顧の程よろしくお願いします。(編集一同)

NTSニュース　第六号
一九九八年十二月二十五日発行